城取博幸の
愛媛県のスパーマーケット見聞録　　NO153
2023年3月6月

「伊予河野氏」と「美濃河野氏」の関係

2023-06-26 17:00:14

四国松山「河野氏」と美濃、信濃「河野氏」との関係

松山市道後温泉「湯築城跡」

1335年、伊予国の守護であった「河野通盛」の代に築城

1585年、四国征伐を目指す「羽柴秀吉」の命を受けた「小早川隆景」に降伏

1602年、松山城建築に当たり湯築城の瓦などの建材が利用され廃城

松山道後温泉の「湯築城資料館」

美濃河野氏の研究

河野氏の歴史

史料館館長に「信濃羽広から来ました」というと

「羽広から来た人は初めて」と歓迎され１時間ほどマンツーマンで説明をしてくれた

河野通信の子「道政」は「承久の乱」に敗れ、信濃「羽広（伊那市）」に流された」と記録されている

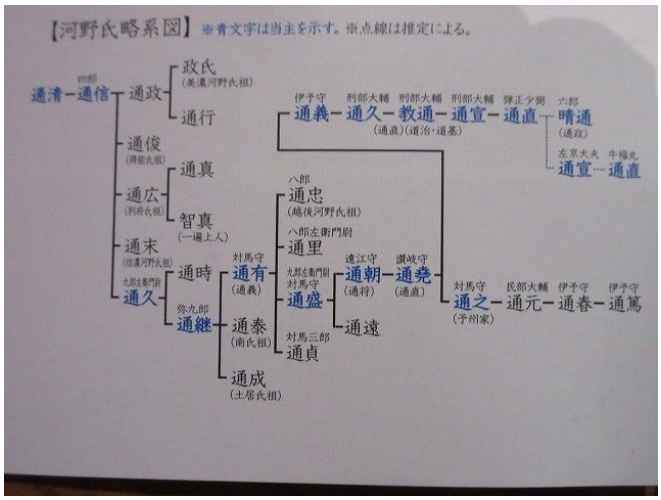
子「政氏」の時代に「美濃河野」を名乗る

「豊丘」は今は長野県だが当時は岐阜県に属していたようだ

羽広の「仲仙寺（羽広観音）」で聞いてみたが

「河野氏」に関しての資料は残っていないという

その後どうなったのか

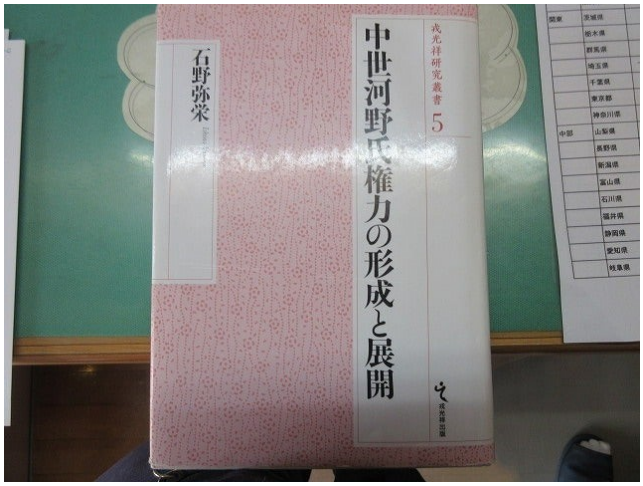


「湯築城資料館」の館長がこの本を持ち出した

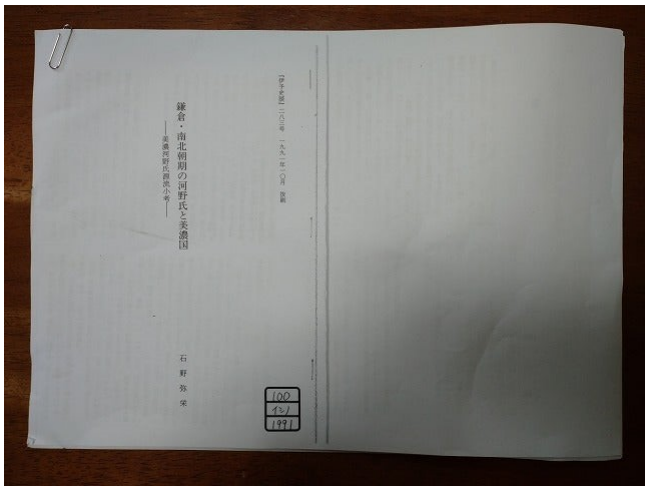
「知りたければ豊丘村へ行くといい」と教えてくれた

豊丘の丘は「岡」ではなく「丘」だとよく知っている

中世河野氏権力の形成と展開



史料館でコピーをしていただいた

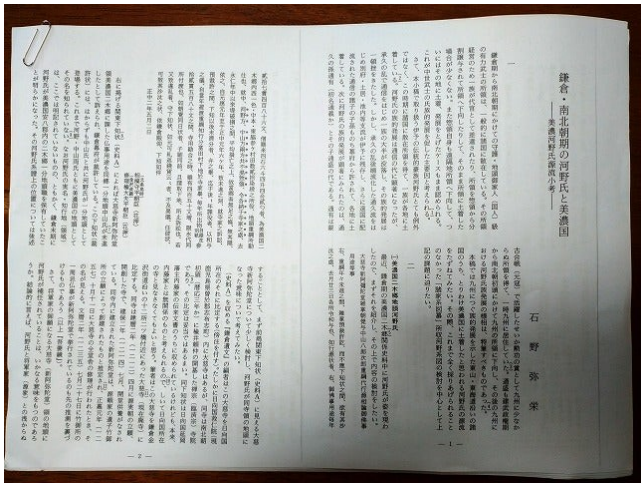


鎌倉・南北朝期の河野氏と美濃国

——美濃河野氏関係小考——

石野弥栄

100
15/
1991



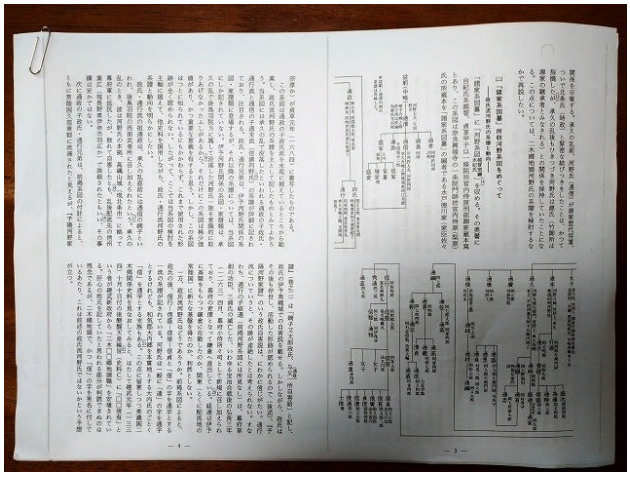
鎌倉・南北朝期の河野氏と美濃国

——美濃河野氏系譜小考——

石野弥栄

家系図を見ながら

館長は「豊丘村」へ行けば分かるという



後日、長野県下伊那郡豊丘村の「豊丘村歴史民俗資料館」へ
赤い点線内が豊丘村
近くには知久氏の「神之峰城跡」、日本のチロル「下栗の里」などがある

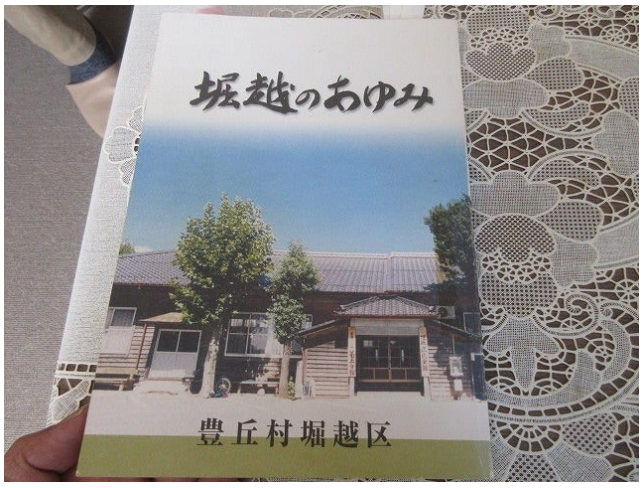
豊丘村歴史民俗資料館」

曜日によって館長が常駐している

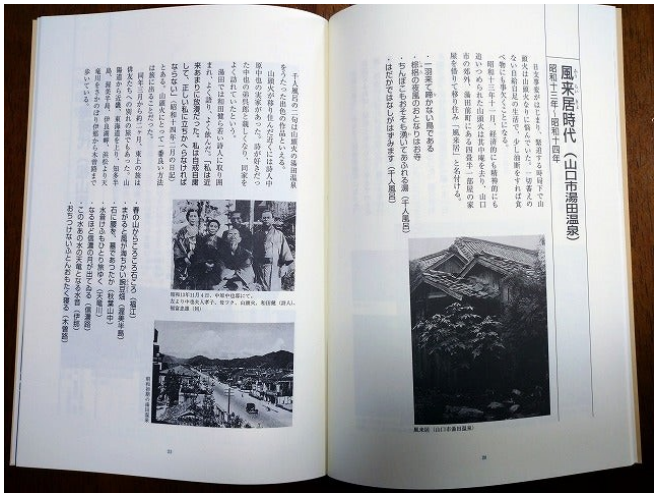
入口の河野人形

時代は新しく、河野氏との関係は分からないという

「河野氏について教えていただきたい」と申し出ると
2 人のスタッフがお茶を入れてくれて「堀越のあゆみ」を見せてくれた
「堀越」とは豊丘村堀越地区のことか



河野氏に関する記事



風来居時代（山口市湯田温泉）
昭和十三年～昭和十四年

目先事業がはじまり、繁盛する時局下で山頭火は山頭火なりに悩んでいた。一切著述のない自給自足の生活で、少し泊まりをすれば食べ物にも事欠くことに。経済的にも精神的にも追いつめられた山頭火は其の庵を去り、山口市の郊外、湯田富町にある四畳半一部屋の家屋を借りて移り住み、「風来居」と名付ける。

・一泊茶で神がかない無である
・根拠の虚風のおとなりは石寺
・ちんぼつもおそそを洗いて寄のほる湯（千人風呂）
・はだかでもはなしがはずみます（千人風呂）

風来居（山口市湯田温泉）

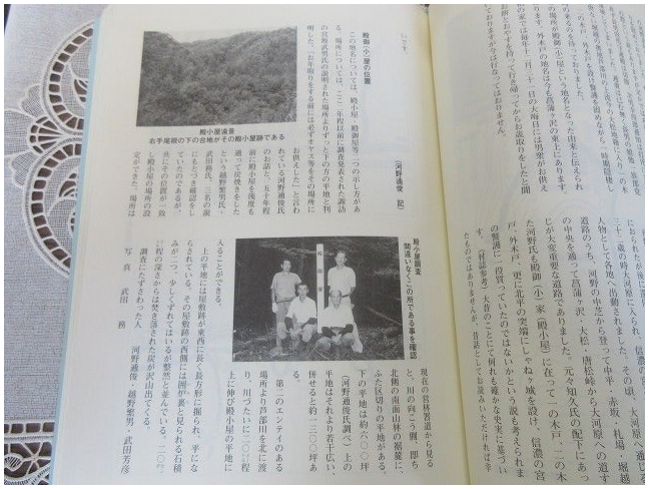
昭和13年11月4日、中郡中温泉にて。左より中島人吉氏、堀空子、山頭火、木村蜂（詩人）、堀富太郎（画）

湯田温泉の共同浴場

「千人風呂」の一行は湯田温泉の温泉風景を入れての絵葉書の作品。「はだかでもはなしがはずみます」とは旅人・中原中也の実家があった、詩好きだった湯田人が移り住んだ湯田とは、同郷をよく語れていたという。

湯田では和田貞さん若い詩人に取り面倒まれ、よく泊まりに来ていた。「私は近来まれに見る幸福だった。私は自己を開放して、まじめに生活した。私は自己を開放しなければならない」（昭和十三年一月の日記）とある。山頭火にとって、豊富な方法は旅に出ることだった。

・青の山々から約二十月、東への旅は
・おかるる風物なかりしかの河畔（温泉半島）
・温泉かぞえ風、東海道をもう一回（温泉半島）
・温泉かぞえ風、伊良湖崎、渚をよろ天
・温泉かぞえ風、伊良湖崎、渚をよろ天（温泉半島）
・なるべく温泉のそばに住むべく（温泉半島）
・この水の水のうまさ、ほんとうにうまい水（温泉半島）
・おちつけばないよんおもたく寝る（大岩島）



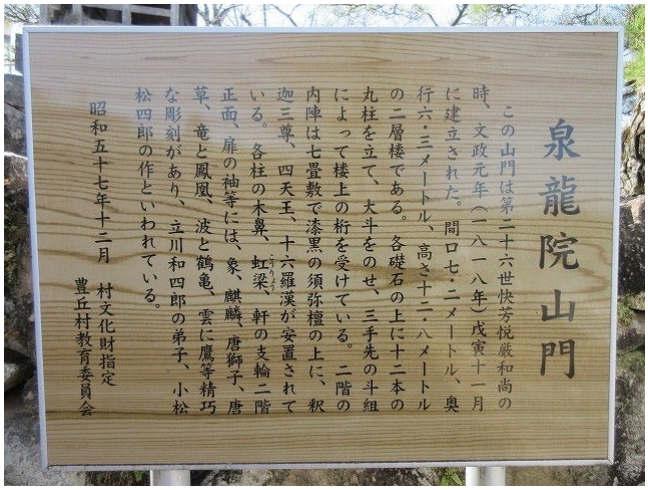
曹洞宗のお寺
1438 年、知久為行（諏訪大社大祝家　神之峰城城主）が開山
1554 年、武田家信濃侵攻により知久氏の居城であった「神之峰城」は落城
泉龍寺もその兵火により焼失　その後再建
知久氏の一族はその後、徳川家に従い、旗本として下伊那郡喬木村領主に復権

長野県下伊那郡豊丘村大字河野 3461

寺側から見た景色

見事だ

大きいな山門



石臼を敷き詰めた参道

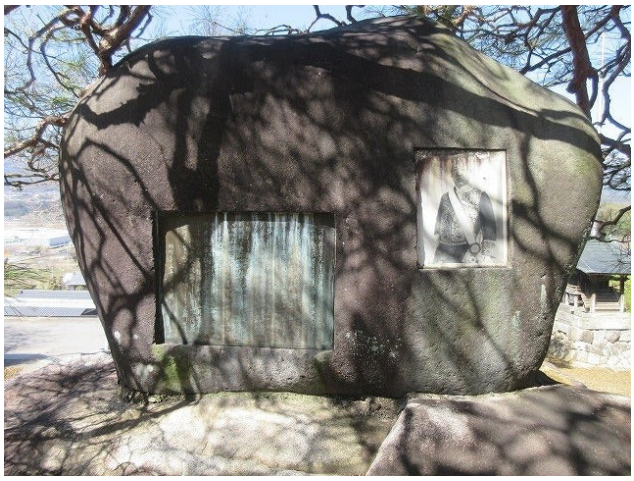
住職に聞いたところ

「久野氏に関する碑があるという」

河野英雄氏（1874 年～1938 年）

日本の官僚　会計検査院長、貴族院勅選議員

親族の義克氏（1913 年～2003 年）は国立国会図書館長



もうあまり読めない

山道を進み、河野氏の末裔が住むという河野地区へ

谷合に小さな村がある

さっそく河野氏の墓へ

歴史がありそうな墓が

古いお墓が何十もある

古い河野氏の家紋

これが「美濃河野氏」の家紋か

比較的新しいもの

「承久の乱（1221 年）」で河野通信が天皇側に味方し敗れて
その子通政が「信濃国羽広」に流された時から 800 年
豊丘の「河野氏」はその血統を引き継いでいるらしい
資料館には資料がなく河野氏が管理しているという

しまなみ海道　大三島「大山祇神社（おおやまつみじんじゃ）」
秘宝館には伊予守護職を命ぜられた「木曽義仲」の具足
「巴御前」の長刀も展示されている

神紋

三は波をうっているが、外側の八角は変わっていない

村上海賊資料館

村上海賊三家

「能島村上」「来島村上」「因島村上」

河野氏は伊予の守護であったことから、河野氏が村上海賊を束ねていたという

遠くに現在の河野氏の家が
プライバシーの問題もあるので近くの写真は遠慮した

梅の花が

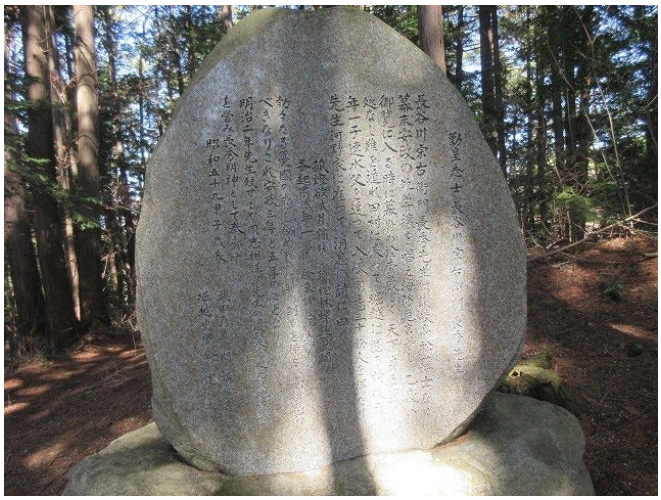
近くの「長谷川宗衛門の墓」

こんな山道を進む

燈篭と祠が

石碑

長谷川宗右衛門
安政の大獄（1858 年）の頃
讃岐の勤王家であった宗右衛門とその息子は「吉田松陰」と同じ牢獄に繋がれていた
宗右衛門が出獄を許されたのは 1869 年
後に豊丘堀越の「河野新左衛門」の家に隠れた
没後、堀越、河野、田村等の恩恵を受けた人々により、高松より歯と髪の毛を譲り受け、河野家の上山に祀った



熊、猪が怖いため早めに退散

猪の糞　猪は同じ場所に糞をする

近くの地図をよく見ると「武田」が多い

道脇の武田氏の墓

家康は信濃統治に当たり武田氏の残党を処分しなかった

信長や秀吉とは違っていた

古い祠

側室の墓

九曜紋が彫られている

地名が河野であることから、河野氏はかなりの土地を所有していたと思われる

源氏側で平家と戦った「伊予河野氏」と甲斐清和源氏の流れをくむ「武田氏」が住む小さな村

河野地区を後にする

近くの道の駅へ

農産物直売所

山菜類

乾物

笑つと納豆

高野豆腐

チルド菓子

翁月堂の和菓子

天ぷらまんじゅう

南信州では彼岸や盆にまんじゅうを天ぷらにする習慣がある

ここで珍しい「大根の乾物」を買う

後日料理してみる

隣のキッチン「そらら」で昼食

メニュー

洋食がメインだ

ハンバーグとコロッケ定食

3種類のソースがかかっている

どちらも丁寧に作ってありおいしい

デザート

どちらを選ぶか迷ってしまう

イチゴのミルフィーユにした

これも丁寧につくられいる

ご馳走様でした
いい一日であった

知久氏
武田信玄との戦いに一族の誇りをかけた下伊那の雄「知久氏」
「知久平城」は、鎌倉時代から戦国時代まで知久氏が本拠を置いた城
戦国時代「神之峰城」は武田氏と知久氏が戦った場所
戦国時代末に徳川家康の家臣「菅沼小大定利」が城を拡張
次回紹介したいと思う

伊予の「山吹神社」と「鎌倉神社」

2023-03-06 17:00:07

伊予観光ガイドマップ「源平ゆかりの地」めぐり
伊予には源平合戦に係わる歴史がいっぱいある
広島市内の「とんかつ　さち」のオーナーがわざわざ広島から車で来てくれて合流

この五輪の塔は誰？
伊予で一番行きたかった場所

山吹御前ゆかりの地

木曽義仲は 1180 年、木曽義仲が木曽で挙兵

京に入り「朝日将軍」と呼ばれた

「巴御前と山吹御前」

平家物語9巻に

「木曽は信濃を出て「巴」と「山吹」とて2人の美女を具せられたり、山吹はいたわりあって都に止まぬ」とある

義仲は巴のみを連れて頼朝追討軍（義経、範頼）に立ち向かう

1184 年、義仲は近江粟津が原に負死

「義仲寺」大津市馬場１－５－１２（22 年 8 月訪問）

木曽義仲の墓

隣には「松尾芭蕉」の墓もあるが詳細は次回に

義仲の墓の近くには「巴供養塚」と「山吹供養塚」がある

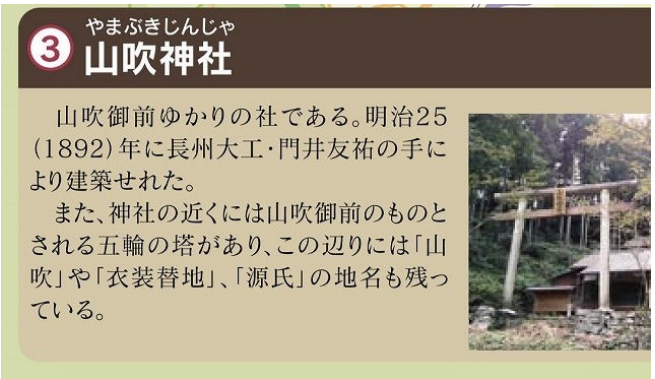
巴供養塚

山吹供養塚

山吹供養塚

あまり読めない

山吹は病気になり京に残るが頼朝の追手が迫ったため、義仲が伊予守であったことから、少数の共と共に伊予に落ちのびるが、この地で命を落とす
心やさしい地元の人々によって五輪塔が建てられた
明治25年（1892年）現在の社殿が造営される



奥に神社が見える

足跡が　誰かが先に来てこの角度から写真を撮っている

山吹神社　愛媛県伊予市中山町佐礼谷

神社は山吹御前の故里（木曽）の方向に向かい、東向きの建てられている

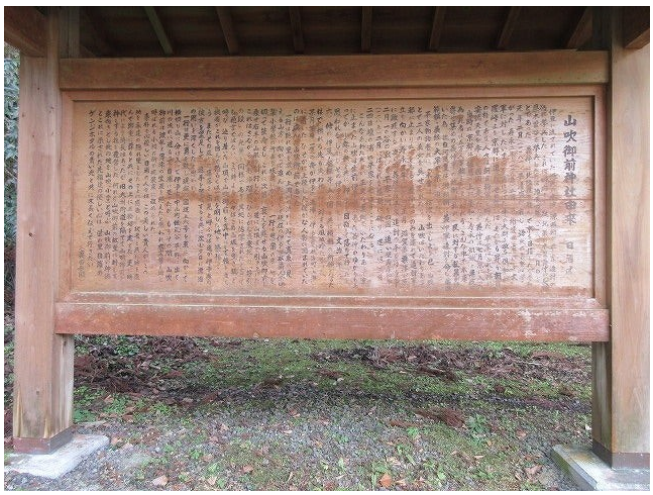
鳥居に「山吹御前」

変わった石垣

裏山を見ると

この辺はこんな瓦状の石が採れるようだ

説明書き



山吹御前の五輪塔があった場所からここに移動したとある

見事な木彫が

明治 27 年（1894 年）大工の棟梁　山口県大島郡西方村「門井友祐」と拝殿の獅子の彫刻の裏に残されている

合掌

木曽義仲か

裏の本殿へ続く道

山吹御前本殿

ここにも見事な木彫が

正面の紋は山吹か

合掌

右側

左側

村の人々が神社の管理をして整備されている
同郷の山吹御前を偲び、神社を後にする

「鎌倉神社」
さらに源氏のゆかり地を紹介します
「鎌倉神社」と「源範頼（のりより）」
もう一人の不幸な人物
松山からはこちらの方が近いが後回しにした
ここは
「源範頼公社殿再建世話人並協力者」の碑

石段を登る

源氏六男の「源範頼（のりより）」が兄「頼朝」から謀反の疑いをかけられ伊豆に流された際、
伊予の「河野氏」を頼って当地に逃れたという伝説がある

拝殿の左に何か

この句は

夏目漱石の句碑 「蒲（範頼）殿いよいよ悲しかれ枯尾花」「木枯らしや冠者の墓撲（なぐ）つ松落葉」 正岡子規もここをお参りしている

トピックス

トピックス

木曽義仲の妻　山吹御前の伝説（中山・佐礼谷）

源氏の木曽義仲が兵を挙げて平家を四国に追いやり、京都に上洛してからは中央政権が義仲の勢力の下に置かれた。そして伊予の国司は義仲が任ぜられることになった。しかし寿永3（1184）年1月、義仲は同じ源氏の一族である頼朝の弟範頼や義経に追われて近江の国粟津が原で戦死してしまった。当時義仲の寵愛を受けた山吹御前は、義仲亡き後、従者とともに京都を出て知人を頼って伊予に逃れることになった。上灘の海岸にたどり着き、ひそかに山奥に忍び込もうと川沿いを上るうちに、大栄口あたりで疲労のため死んでしまった。従者たちは笹竹に乗せて山坂を曳き登り、佐礼谷の仁壬川のほとりに墓地を定めて葬った。この集落を山吹といい、曳坂という坂道、一夜の宿にした築樋の地名が残っている。

源範頼の墓で繋がった正岡子規と夏目漱石

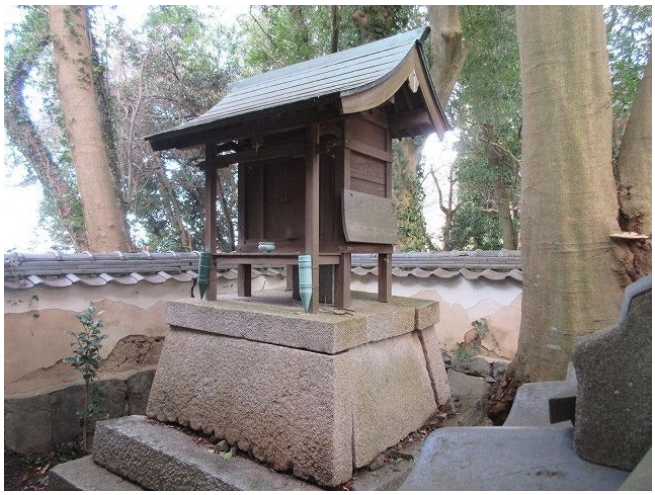
松山市立子規記念博物館所蔵

上吾川鎌倉神社の裏手に源義朝の第六子である源範頼の墓がある。範頼は木曽義仲を追討し平家を破り、後に頼朝によって伊豆に流され処断されたという。大学予備門に在学中の正岡子規はこの墓を訪ね、漢詩を書いている。その後、夏目漱石も松山中学の英語教師赴任時にこの地を訪れている。「蒲殿のいよいよ悲し枯尾花」と「木枯らしや冠者の墓撲つ松落葉」を詠んでいる。神社の社殿左手前に句碑がある。また、伊豆の修善寺にあるもう1つの範頼の墓にも詣でて、それぞれが句を残している。子規、漱石の範頼びいきの奇縁である。

拝殿で合掌

奥の本殿

本殿は小さい



その裏側には

江戸時代に大洲藩主が墓石を建立し、鎌倉神社として「源範頼」を祀るようになった

「蒲冠者範頼公墓」と書かれている

源範頼（のりとも）の墓
源範頼は源義朝の 6 男で、遠江の蒲御厨（今の浜松市）で生まれたので「蒲冠者（かばかんじゃ）」ともいう
1180 年兄の頼朝が兵をあげてから、弟の「義経」と共に、一方の総大将として「木曽義仲」や平家との戦いや、九州の遠征などで手柄を立てた
しかし、「曽我兄弟」の仇討事件で頼朝に疑いをかけられて伊豆にへのがれ、この地で亡くなりここに葬られたと伝えられる
大洲（おおず）藩主の崇敬厚く、藩の補助で幕末に、新墓標や祠は建立された
幕末の大洲藩主は「加藤貞康」か

家臣の墓か

隣の堤

ため池のほとりには家臣と思われる 10 数基の墓もある

今は荒れているが周りはキチンと整備されている

そこに咲く水仙

菜の花も咲き始めている

「梅山釜直売所」大洲城に向かう途中に砥部焼を見に行く

店内

砥部焼の代表的な絵柄

いくつか購入

伊予から大洲城に向かう

大洲城は見学する予定はなかったが、宇和島から松山に向かう車窓から見えてしまったから
車であれば伊予から行くことができる
なかなか来られないところまで来られた
ドライバーをかっていただいた「広島　とんかつ　さち」のオーナーD 氏に感謝